イネ縞葉枯病に対する薬剤による効果的な防除体系

農業総合センター農業研究所

イネ縞葉枯病はヒメトビウンカが媒介するウイルス病です。イネ縞葉枯病は発病してから治療する方法がなく、被害を減らすためにはヒメトビウンカを防除して、イネがウイルスに感染する機会を減らすことが重要です。そこで、イネ縞葉枯病の多発生地域における防除方法として、殺虫剤の育苗箱施用と本田散布を組み合わせた体系防除が有効であることを明らかにしました。

体系防除により効果的に被害軽減

殺虫剤の育苗箱施用と本田散布を組み合わせた体系防除は、イネ縞葉枯病多発生地域でも高い防除効果が得られます。また、殺虫剤の育苗箱施用を行った場合、本田散布時期が適期（例年は６月中～下旬）から１週間程度遅れても防除効果が低下しにくいことが明らかになりました（図１）。

本田散布は、天候等により適期に実施できない可能性がありますが、体系防除を行うことで、適期から遅れても安定した防除効果が得られます。

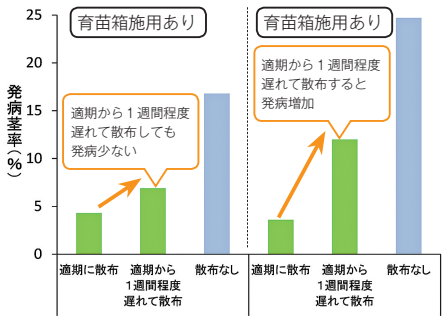

図１　イネ縞葉枯病防除における育苗箱施用の有無と本田散布との関係

注）育苗箱施用剤はイミダクロプリド粒剤、本田散布剤はシラフルオフェン乳剤を使用した

体系防除で収益UP！

体系防除は、育苗箱施用や本田散布のみの場合と比較して防除経費は増加しますが、減収軽減効果が高いことから収益は増加します（表１）。

表１　体系防除による収益の試算

育苗箱施用	本田散布	粗収益（円／10a）	農薬費等（円／10a）	粗収益－農薬費等（円／10a）
施用あり	適期に散布	116,534	3,862	112,672
	適期から１週間程度遅れて散布	116,306	3,862	112,444
	なし	95,097	1,962	93,135
施用なし	適期に散布	113,113	1,900	111,213
	適期から１週間程度遅れて散布	108,324	1,900	106,424
	なし	80,046	0	80,046

活用上の留意点

- これまでに得られた成果をもとに「イネ縞葉枯病防除マニュアル」を作成し、農業研究所ホームページに公開しましたので参考にしてください（図２）。
- 本田散布の適期は、病害虫防除所が発表する病害虫発生予察情報等を参考にしてください。
- 試験に使用した農薬は、平成30年４月11日現在、水稲に登録のある薬剤です。

イネ縞葉枯病とは

図２イネ縞葉枯病防除マニュアルの内容（一部を抜粋）